



展示解説をする高橋センター長



パネルディスカッションの様子

パネルディスカッション

【パネリスト】

奥田 晴樹氏（金沢大学教授）
岩城 卓二氏（京都大学准教授）
常松 隆嗣氏（関西大学非常勤講師）

【コーディネーター】

藪田 貫（関西大学教授／なにわ・大阪
文化遺産学研究中心
総括プロジェクトリーダー）



藪田： お二人の先生に、心のこもった話をさせていただきましたので、それをもとにしばらく議論をしてみたいと思います。まずは、津田先生の経歴を司会の松永君が作ってくれましたが、奥田先生が1972年に津田先生に出会われて、岩城さんが1982年ということですから、おそらく最晩年の最晩年、病院で授業をするという体験を、最後になさいました常松さんの方から、本当に短い出会いですが、お話ししていただこうと思います。

常松： 津田先生は92年11月15日にお亡くなりになりましたが、私が関西大学の大学院に入



りましたのが92年4月。その4月から7月までのわずか三カ月間ですけれども、津田先生に高槻の医大で授業を受けました。

授業を受けたと言いましても、奥田先生や岩城先生とは違いまして、病院に行くに「まず家に帰ろう」とおっしゃるんです。家に帰って何をされるかという、まず窓・雨戸をあけて、奥様の仏壇をあけて、必ずあいさつをされる。「今帰ってきたよ」というようなごあいさつをされてから授業をされる。授業と言っても、「おまえ何かしゃべってみ」と言われて、何をしゃべったらいいのか、こちらは準備も何もないんですね。

そのとき、私は学部時代に都市史といいますが、城下町の研究をしておりまして、大学院に入ったころからは農村史や大庄屋の研究をやりたいという話をしました。学生なりに熱く語ったつもりでしたが、ふと見てみると、先生はずっとベッドの中で寝ておられる。多分、そのころ非常に体調が悪かったと思いますが、「これは困ったな」と、先生のコメントもいただけないのかなと思ってるころに先生が起きられて、次のようにおっしゃるんです。「おまえの問題点はわかっておる。ただ今は言わん。夏休みまでにじっくり考えてこい。夏休みになったら答えを教えてやろう」と。「もうとんでもない先生やな」と思いながら、その帰りには「車で高槻の医大まで帰りましょう」と言うのと、先生は「松坂屋に寄れ。地下に行って追分だんごを買え」とおっしゃるので、私が「先生、血糖値が高いのにそれはだめですよ」と言うのですが、追分だんごを必ず買われていました。

その当時、先生と私ともう一人の院生の三人で高槻病院までお送りしていましたが、必ずだんごを3本買っていただきました。これも笑い話ですが、必ずみたらしとあんこと三色だんごなんです。その後、病院に帰るとまず血糖値を測るんです。食べてから測ると血糖値が高くなるので、看護婦さんが「津田さん、きょうは大丈夫ですよ」と言われると、「さあ、だんごを食うぞ」とおっしゃるんですね。僕たちは当然1本1本いただけたら、「おまえのみたらしを1個おれにくれ。おまえにわしの三色だんごの赤いのをやろう」と。次は、「おまえのあんこのついた団子をおれにくれ」といった具合に1個ずつだんごを分ける

んです。だから、串に刺さった状態じゃなくて、お皿に乗った状態でだんごを食べていました。

他にもお見舞いでいただいた物を、先生は持って帰れとおっしゃるんです。リンゴをもらって家に持って帰ろうとすると、「ここで切れ」とおっしゃるんです。それも必ず、一人でリンゴを食べるのではなく、みんなで分けろとおっしゃっていました。何でそんなことを、と思いましたが、あるとき有坂先生にそのお話をしたことがあるんです。すると有坂先生は、「それは戦争を体験されているなかで、同じ物を一人で食べずに、みんなで分けたら倍楽しいからやろう、津田さんもそう思っているんだろう、だから、先生がそうおっしゃったら必ず先生の言うとおりにしなさい」とおっしゃっていました。

授業については、歴史学というより、ノーベル賞の福井謙一さんと同窓だったことや、宇宙の話、例えば、ホーキング博士のビッグバンの話をしてくださいました。先生は「宇宙は楕円形になってな、中心が2つあるんだ」とおっしゃるんですけども全然わからなくて、「ああ、そうですか」と拝聴しておりました。

ただ、奥田先生のお話にありました『史料保存と歴史学』の出版は、非常に楽しみにされていました。6月頃に少し元気になられると、「大学へ行きたい、あの本を使って授業をしたい」とおっしゃっていました。私は教え子ですから、本をいただけるのかなとかいう甘い考えを持っておりましたが、「本は買うもんや」言われて、津田先生手ずからいただきました。

非常に雑駁な話ですが、津田秀夫先生の思い出というのは、最晩年であるからこそ、こういう笑い話と言いますか、ただ、そのなかには岩城先生のお話にもあったように、「自分は答えを教えてやらん、自分自身で勉強してこい、おれはわかってるけど最後まで調べてこい、それで議論をしようやないか」という姿勢や、歴史学をどう学んでいくかについて、最晩年であっても、津田先生から教えていただいたと思っております。私からは以上です。

藪田： ありがとうございます。

幾つか話してみたいと思いますが、一つは大

学という形から教師と学生、特に東京教育大学は関係者の方に聞くと、やっぱりかなり変わっていた大学だったというところはあると思います。津田先生だけじゃなくて他の先生方も変わっていましたが、学生も多分変わっていた部分もあったと思います。教育大学の雰囲気みたいなものが先ほど岩城さんの話で、東京教育大学という文化がなくなる、もちろん歴史もなくなるわけですが、そこには戦後の日本の大学が持った教育大学の学風があるだろうと思います。そういう教師と学生のお話をもう少ししていただきたいと思います。今日、東京教育大学の卒業生である長谷川伸三先生も来られておりますので、少し補足をしていただけますでしょうか。思い出話でも結構ですので、津田秀夫を語りながら教育大学の授業や、あるいはその生涯を語っていただけたらと思います。

長谷川： 長谷川伸三です。現在(2007年12月)は大阪樟蔭女子大学におります。私が東京教育大学に入ったのは1959年です。入試のときから津田先生のお顔は見ており、その後、学部4年間、大学院がマスター3年、ドクター5年、さらに学振を1年間もらいまして、延々、1972年までずっと東京教育大学に通っておりました。

今から考えると、津田先生が40歳から50歳代の半ばでしょうか、要するに助教時代で、一番脂が乗っていた頃だろうと思います。前半は大変元気でしたが、後半は、やはり甘い物が好きだったのがたたったのか、糖尿病にかかりまして入院されることもありました。前半は、大学の雰囲気も明るくて、まだ筑波大学移転問題の陰もありませんでした。ただ、学生の方はちょうど60年安保のころでしたから、余り学校に出ないでデモにばかり行っていた時期もありました。大学の施設はあまり良くはありませんでしたけど、とにかく先生方はそれぞれ研究室にこもって、研究に明け暮れていて、われわれもそこで授業を受けたりしておりました。今からみると、津田先生の一番脂が乗った時期だったと思います。

津田先生の学問について、例えば『封建経済政策の展開と市場構造』は難しい本で、大学院時代にその本の書評会をやることになり、難しくてなかなか歯が立たなかったように思っています。



学部時代は、集団指導体制というか、ゼミといっても複数の先生のゼミに出てもいい。だから、誰が指導教官ということはなかったように思います。それは、ある面では少し無責任なところがあったと思いますが、今から考えると結構よかったです。私が東京教育大学に入ったときは、津田先生が来られて4、5年でした。津田先生が来られてからは、学科の運営は教授でも助教授でも対等に議論をしようということで、いろいろ慣例となっていた問題も全部一から見直そう、ということのようでした。私どもが入学した頃は、集団指導体制が確立しており、それはおそらく津田先生の功績だったのではないかと思います。

あと個人的には、ドイツのシュツットガルトで行われた国際歴史学会に津田先生と同行したときの思い出がございます。おそらく佐々木潤之介さんが音頭をとったと思います。私はそれに同行することになりました。初めて海外に行くので大変緊張して、東京の箱崎町でまず空港バスに乗って成田に行くわけですが、そのとき津田先生の隣にいたんですね。その後の飛行機でも津田先生の隣だったんです。当時、ヨーロッパまで行くのはアンカレッジ経由で行くわけですから大変時間がかかるわけですが、先生はしゃべりっぱなしなんです。私は初めての海外旅行だったため少しでも、一時間でも眠りたかったのです。ですが先生はずっとおしゃべりになって、ヨーロッパに着いたとき、私はもうヘトヘトでした。到着後、これまた津田先生と相部屋だったんです。これも参りましたが、先生とそういう旅行を一緒にした思い出があります。

国際歴史学会では、津田先生は英語で報告をする課題を持っておりまして、日本の封建制について報告しなければならなかったのです。英語の草

稿はもう既にできていましたが、どうも私が読んだところ、津田理論ではなく佐々木理論で書かれていたようです。よく妥協したなと思ったんですけども、それはともかく、部屋の中で草稿を読んでいるんです。それで、そういう大事な報告を控えてるから、少し落ちついてゆっくりなされればいいと思うんですけども、前半スペインやポルトガルでの昼間のツアーの後、もう少し追加のオプションツアーがあると行ってしまいます。私が「先生、帰りましょう」と言ったら、「いや、わしゃ帰らん」と。せっかくこの町に来たから、山の上の中世の城跡を見に行くと言い、それから帰ってくると、先生は「疲れた、疲れた」と言うんです。疲れたと言いながらも、佐々木さんたちに誘われると、どこかに行ってしまう、後で「何しに行ったんですか」と聞くと、「テレビで闘牛を見てきた」と言っていました。スペインに来て闘牛がわからなければ、スペインに来た価値がない、と言っていました。後半、ドイツに着いてからは報告も近づいたということで、先生は個室になり、私も個室になって、ホッといたしました。

先ほど奥田さんのお話のなかで、抜刷のファイルというお話がありましたが、あれもいろいろ変遷がありまして、最初のうちは穴をあけて、ひもでとじていたと思いますが、だんだん増えてくると、のりで固めてとじるようになりました。その抜刷はアイウエオ順になっておりまして、厚いもの、薄いもの、いろいろあるわけですね。こちらが、やっとの思いで書いた論文を先生に持っていくと、「よしよし」と言って、「ハ」から長谷川の分を出してきて、「君のはまだ薄いな、もっと厚くするようにせにゃならん」と言うんですね。それは現在、幸いなことに大阪市史編纂所で引き取っていただいております。

ちょっとまとまりませんでした、そんなところです。

藪田： ありがとうございます。では次に、津田先生いわく「わしゃ大阪が好きやねん」ということで、少し大阪論について議論をしてみたいと思います。今日のフォーラムの主題は「なにわ・大阪の文化力」ということで、大阪という場所が社会のなか、あるいは文化のなかでもつ特徴、あ

るいは個性をもっていると同時に、それは集められた史料にも出てくると思います。常松さんの頃は、そのようなお話はありましたか。

常松： 岩城さんのレジュメにありました、摂河泉の農村行脚、摂河泉へのこだわり、にも関わりますが、津田先生がもし生きていらしたら、聞いてみたいことがあります。先生は摂河泉にあれだけこだわっていながら、北河内では残念ながら津田秀夫の名前を聞かないんですね。津田先生にとって北河内は魅力的ではなかったのかなと考えるわけです。

一つだけお話をしたことがあって、生まれ育ちはどこだ、というお話を先生がされたことがあり、私は枚方ですと言いました。すると、先生は古島敏雄さんの話をされました。古島批判をされるんですね、「古島は歩いて見とらん、自分は現地を足で歩いたところに違いがあるんだ」ということを聞いたことがあり、その言葉が非常に印象に残っています。

藪田： ご兩人にもお話いただきたいと思いますが、まず奥田さんにお聞きいたします。津田先生が東京に移られて油の研究をやっておられるときに、古文書を持ってきて、大阪の話はやられていましたか。

奥田： はい。古文書のダンボールを持ってきて、「はい、これを読みなさい」と適当にどこか史料をとってきて、自分でそれを解説するわけです。でも、読めないんですね。仕方ないので、津田ゼミの対策ゼミというのを作りまして、古文書の勉強をしました。ですから、大阪の史料は読ん



だ記憶があります。

津田先生が、関西大学へ来られる直前に論文集にまとめられた『幕末社会の研究』の中で、「起爆剤論」を述べておられます。要するに、近世国家を解体していく起爆剤になるのが、いわゆる摂河泉、大阪周辺農村だということを言われたんですね。

今、常松さんが言われて気づいたのですが、先生は全部回り切れなかったんですね。というのは、よく考えてみると期間が非常に短いんです。1947年から52年までなんです。東京に来られてからは、当時の交通事情や経済的な事情から言っても、頻繁に大阪へは史料調査に行けないですから、おそらくその期間に、大変足しげく動かれと思います。

もう一つは、先生は、実は農村だけではなく、都市の史料も見ておられる。船場などに行かれていたんです。「船場では店方と奥方では言葉が違う。それで、奥方に入らないと史料を見せてもらえないから、わしは香道をやった」とおっしゃっていました。お茶、お花、香道、一通りみんなやっただと。お手前を受けてからお話が進んで、はじめて「史料を見せましょうか」ということになる。これは、歴史家として史料調査を行う基礎的素養だと言っておられました。ただ、先生には残念ながら船場の論文はないんです。おそらくそういう研究もやりたいとは思ってらっしゃったのかもしれないけれど、そこまでは手が回らなかった、あるいはいい史料にめぐり会えなかったのかも知れません。ですから、北河内は行っておられないかも知れない、と思いました。

藪田： 岩城さん、津田先生が関西に戻られてからはどうでしたか。大阪周辺歩きに連れていかれましたか。

岩城： 僕は1回ですね。もう先生はお年でしたし、農村調査は関西大学に移られてからは、新たにされることはなかったと思います。

先ほど奥田先生がおっしゃっていましたが、先生が大阪にいた期間は本当に短期間でしたし、農村調査が和泉国など、割と南部が中心になっているのは、宮本常一さんのフィールド調査自体が



南部から始まっており、たしか津田さんの担当は和泉国だったはず。そのため、そちらから始まっているのだと思います。それと当時おられたのが平野ですね。当時の交通の便などを考えると、南部に行ったのではないかと思います。

ですから、私は本当に関西大学に移られてからの津田さんしか知らないで、よくそういう農村調査をしていた話を聞きますが、実際に一緒に行ったということはないですね。

藪田： さきほど奥田さんの話に出た香道の話は驚きましたね。

92年に津田先生が亡くなられた年に古文書室ができますが、そのとき私は古文書室の一角に、畳を敷いてもらいました。それは、一つは京大の陳列館が敷いていたということもありますし、私も古文書調査に行くと、応接室ではなく畳の居間に通されるわけです。そこで畳の上でご主人から史料を見せてもらったり、また話を聞かせてもらうわけで、ある意味面接をされるわけです。やっぱり畳にちゃんと座って対応できなければ古文書は見せてもらえない、というふうに私も思ったので、敷いてもらったところがあります。

ではもう少し、その史料について議論していきたいと思います。歴史学は史料が大事だ、と一般的によく言われますが、津田先生の史料へのこだわりというのは確かに相当なものがあったと思います。岩城さんの時は、研究室に古文書を置いて、それを次々と読んでいくという授業のスタイルでしたか。

岩城： 研究室には無造作に置いてあって、「こんな史料がある」といって見せていただきました

たけれど、それを授業で使われるということにはなかったですね。特に一緒に史料を読むというものもなかったし、この古文書を読む、というものもなかったですね。でも史料に対するこだわりは、本当にすごかった。

藪田： 奥田さんに振る前に、藤原有和さんがおられますので、一言お願いします。藤原さんは学部は違いましたけれど、津田先生の警咳に接せられたと思いますが、いかがですか。

藤原： 私は83年に、図書館古文書室に勤務することになりました。津田先生は、古文書室で授業をされましたので、私も大いに勉強になりました。たしか津田先生が、最初に大学院の入学試験で古文書の試験を始められたと思います。

ただ残念ながら、新しい図書館ができ、古文書室が解体してしまうという問題が起きまして、津田先生はそれを大変問題になさっておられました。図書館の地下2階に古文書の保管室がございまして、その横の部屋でしばらく授業をなさっていました。古文書室は文学部に新たに復活しましたが、そういう点では一時、先生は授業がしにくい状態にありました。

私も本当にいろいろ津田先生に教えていただきました。今お弟子さんのお話を聞いて、津田先生と同じ世代のお世話になった先生方のことも、あわせて考えておまして、その世代の先生方はすごかった、気骨のある先生方が多かったと思います。こういうことを考える機会を与えていただいて、どうもありがとうございます。

藪田： 図書館で古文書が授業で使えないから、ストライキをしようとしたら、有坂先生と二人で、「わしゃ組合の委員長やからストライキできるんや」とか言ったとか、有坂先生からお聞きしたことがあります。関大初のストライキが成立するとかいう話があったらしいですけど、どこまで本当かどうか。

奥田先生には、東京教育大時代の史料の扱い方や、史料と教育ということで少しお話をいただけますか。



奥田： 先生は関東の農村でも調査をやっておられました、基本的には長谷川先生をはじめ、お弟子さんたちにお仕事をさせるといふか、していただくというパターンだったと思います。私たちの頃は、もう農村調査はやられていませんでした。農村調査実習もなかったです。ですから、「おまえたちを農村に連れていってやることができなくなった」ということはおっしゃっていました。そういうチャンスがなくなってきた、減ってきたのでしょうか。

一つは、そういう調査が自治体史の編さん事業と関わって行われるようになってきました。先生は「大阪市史」には関わっておられましたが、関東農村では、どこかの市史の編さん委員というようなお仕事は、引き受けておられなかった。これは先生の地方史についての、自治体史編さん事業に対する独特のご意見があったためようです。そういうことで、実際に私は農村調査には行っておりません。

先ほど少しお話に出ました史料に対するこだわりというのは、むしろ研究対象としての史料というより、史料保存そのものについて、これは先ほど岩城先生がおっしゃったことで、なるほどな、と思ったんですけども、やはり関西に来られてからだと思います。

藪田： ありがとうございます。最後に、津田秀夫先生を語るときには、やはり戦後歴史学という問題と関わります。我われも歴史学を今やっておりますけど、先生方と違うのは世代です。戦線の中で、周りではバタバタと倒れていく中をくぐり抜けて、生き残った者として、なぜ日本史をやるのか、なぜ大阪で史料調査をしていくのか、ということをおそらく考えざるを得なかったんだろ

うと思うのです。そういう意味では、そこに大阪があるからだとか、大阪で生まれたからではなくて、おそらく死線を越えたものがあるだろうと思います。そこが、我々の歴史学がどうしても超えられない、戦後歴史学初代の人たちの強さと言いましようか、高さだと私は思います。そういう点はおそらく世代が違って常にも考える、あるいは感じる場所があったらと思うので、最後に岩城さんから順番にお願いいたします。

岩城： 今日のお話で申し上げましたように、そのことを津田さんは懸命になって私たちに教えてくれたのだと思います。津田さんは自分が常に第一線の研究者であって、自分が考えてきたこと、考えていることを学生にぶつけていくことが、最大の教育であると考えておられたのだと思うんですね。だから、何か古文書を丁寧に教えてあげるとか、論文と一緒に読むとかというのは多分、津田さんにとってはさして重要な問題ではなくて、いかに自分が第一線で活躍し続けるか、ということが津田さんの教育であって、そのなかの最大の課題が、「歴史学をおまえはなぜやるのか」ということだと思うんですね。

これは、高度経済成長を見ながら育った私たちの世代にとって、難問中の難問で、容易に答えは見つからない。私のなかでは、その戦後歴史学のなかで、「なぜおまえは歴史学をやるのか」という問いについては、まだ何か答えを出せるものではありません。

ただ、私は少し津田さんと関心が似ているので、最近考えているのは、津田さんの原生プロレタリアート論もそうですけど、確かにある局面の話かもしれませんが、しかしこれは明確には佐々木さんが出した豪農半プロ論を超える話でもあり、全く違う近世社会の解体論であります。畿内から発信した近世社会解体論というのは、やはりしっかりと見直す、位置づけるべきであり、それは自分の課題だと思っています。

藪田： 次に、奥田先生お願いします。

奥田： 戦後歴史学の問題というのは、研究姿勢の問題だと先ほど申し上げましたが、やはり二つ

考え方があったような気がします。一つは、どこの地域でも同じようなことが見出せるという、そういう発想ですね。類型論的な発想と言いますか、そういう発想は、津田先生はとられていませんでした。地域間には構造があり、それが日本の全体を組み上げている。それぞれの地域が構造のなかで、それぞれの役割を持っている。いわゆる、フラットな関係ではない構造が、地域社会の日本全体的にはあり、その中で大阪というのは、やはり政治的な頭部ではないけれど、経済的の心臓部であって、大阪はやはり非常に重要な意味を持っていたことを言っておられました。佐々木さんの議論には、基本的にそれがありません。

考えてみますと、一人一人個性ある人間が歴史をつくっているように、地域もやはり個性を持っていると思います。そのなかで、大阪の持っている意味は非常に大きい。近世社会での役割も大きいし、日本の資本主義、近代化のなかでも大きい。その点は、先生はいろいろと我われに宿題を残してくれていると思います。

藪田： 最後に常松さん、お願いします。

常松： 岩城さんよりまだ若い世代で、なぜ歴史学を始めたか、ということをお問われたときに、それは司馬遼太郎であったり、身近に何らかのきっかけがあったからですが、ただ、大学・大学院に進んで、教員として学生たちに教えていくなかで、それは考えていかななくてはいけない問題だと思っています。

最初に少し笑い話的に、津田先生の戦争体験がきっと物事を動かす原動力なんだという話をしま



したけれども、あれがまさに津田秀夫が体現したかった歴史学というか、おれが体験したことを追体験ではないけども、こういう具合にして生きていくんだよ、ということをお教えてもらったのかなという気はしております。

私自身も畿内近国のことをやっていますが、私は支配の面ではなく、下から積み上げていくような地主制をやっています。そのなかで、津田先生や中村哲さんなど、あの時代の方たちの研究を再度検討する時期に来ていると思います。

先ほども少し言いましたように、北河内の研究が漏れているという話がありますが、もう一度、畿内・大阪の位置づけを考えてみたいと思います。一つは、渡辺尚志さんたちが研究した岡田家文書の研究がまもなく出ますが、地主制研究は古くて新しい研究だと思います。津田先生ができなかったこと、もしかしたらやり残されたこと、忘れていたことを再構築していく必要があると思います。もう一つの大阪というか、畿内近国の位置について考えてみようと思っております。

藪田： はい、ありがとうございました。

一つだけ私からも思い出話をさせていただきます。大学に教授は大勢おりますし、歴史家も大勢おります。亡くなられた先生を常にこうして回想することは、必要もないし、ほとんど意味のないことだと思いますが、やはり、時にしなければならぬ人がいると私は思います。学会がやるのは当然ですけど、関西大学でなぜやるのか、それは私の意地みたいなところがございます。私は津田先生と入れかわりのような形で関大に来て、そこには津田先生が残された古文書があり、—それは有坂先生を通じてやってきました—、私が関大にいる間にしなければならぬ仕事として、いわば送られてきたものだというふうには自覚したところがございます。もちろん研究上の関心もありますけど、おそらくそれは津田・有坂両先生が残された、私への一つのメッセージだということで受け継いでおります。

津田先生にはお嬢さん三人がおられますが、先日、そのうち二人が来られました。常々津田先生の古文書目録をお送りすると喜んで励ましのお手

紙をいただきますが、私がすごいなと思ったのは、そのお嬢さん三人すべて、結婚相手が文系ではありません。理系なんです。父親のような文系の研究者と結婚すると、いかに子供が悲惨な目に遭うかということですね。ということは、給料のほとんどが古文書に消えていく。新しいスカートもセーターも買ってもらえない。どこまで本当かどうかわかりませんが、そこまでできる学者魂というのは、一体何だろうかということですね。

今日、会場に橋本猛さんという方がおられて、津田文書を全点ご覧になった方です。1点1点、橋本さんに史料整理をしていただいているのですが、家族の悲鳴が聞こえてくるようなこの古文書を関西大学が、たまたま私がいるときに受け継いだということです。これは、やはり是非思い出さなければならぬ。しかもおもしろいことに、自分が研究していない史料もたくさん持っておられる。まさに保存しておられたわけです。

自分が研究するために史料を集めるのは私もやります。しかし、将来やらないだろうと思う史料までも集めるということは、しかも娘のスカートも買わないで集めるということは、相当の思いがない限り、私はできないだろうと思います。こういう人が、大阪が生み出した歴史学者としておられる、その後を私はいわば受け継いでいるという喜びと責任感があったんだと思うのです。

今回、松永君もこの展示・企画をやりながら、津田秀夫という人に改めていろいろと感じ、思いを持ったろうと思いますので、松永君の話で終わりたいと思います。展示をやってみた感想を、どうぞ。

松永： 僭越ながら、今回展示を担当させていただきました関係で、一言だけ申し添えさせていただきます。今回の展示にあたりまして、津田先生の古文書の中で、どの文書に注目すべきかを考えましたところ、先生の平野含翠堂の研究に焦点を当てて展示をしようと思いました。加えて、その他の古文書を紹介することにしました。

展示の最初の部分をどのように展示しようかと考えましたけれど、はじめは、先生のご紹介をしようと思い、今回の展示では津田先生の日記や研究用のノートなど、その他著作物等を展示させて

いただきました。私にとって津田先生は全くお会いしたこともございませんし、どのようなお方は、漏れ聞くと、耳にするところだけですのでわかりませんが、津田先生は情熱的で、豪快で、型破りな先生ということを知っていました。

今回、本当にありがたかったのは、先ほど藪田先生のお話にもありましたように、津田先生のご遺族の方が来てくださり、展示を見ていただいた、大変喜んでいただいたのが、展示を担当させていただきました。つたない展示ですが、そちらもご覧いただきましたら、幸いに存じますので、どうぞよろしく願いいたします。

藪田： 最後に展示責任者の松永くんの話をしていただきました。これで終わりたいと思います。どうも遅くまでありがとうございました。(拍手)

常松 隆嗣 (つねまつ たかし)

関西大学・大阪商業大学非常勤講師。専門は、日本近世史。1970年、大阪府に生まれる。2004年、関西大学大学院文学研究科博士課程後期課程修了。学位論文「近世の豪農と地域社会」により博士(文学)。

論文に「近世後期における豪農と地域社会」(『ヒストリア』167号、1999年)、「篠山藩における国益策の展開」(『ヒストリア』185号、2003年)、「幕末維新期における豪農の活動と情報」(平川新・谷山正道編『近世地域史フォーラム3 地域社会とリーダーたち』、吉川弘文館、2006年)、「近世後期における河内の諸相」(渡辺尚志編『畿内の豪農経営と地域社会』、思文閣出版、2008年)などがある。

藪田 貴 (やぶた ゆたか)

関西大学教授。専門は、日本近世史。1948年、大阪府に生まれる。京都橘女子大学を経て、1990年に関西大学教授として着任。当センターでは、総括プロジェクトリーダーを務める。

主書に『国訴と百姓一揆の研究』(校倉書房、1992年)、『女性史としての近世』(校倉書房、1996年)、『日本近世史の可能性』(校倉書房、2005年)、『近世大坂地域の史的的研究』(清文堂出版、2005年)がある。